

2025年度指導者講習会 2日間の振り返り

公益財団法人日本バウンドテニス協会
理事、名誉コーチ 岡田博子

皆さんお疲れ様でした。

今回の講習会は、昨年はいらっしゃった前会長さんの面影がまだちらつく中での開催となりましたが、新体制がととのい将来を見据えた新たなスタートをきる中身の濃い講習会となったと思っています。その将来を担って下さるのが、まさに皆さんですが、熱心な受講姿勢を見せて頂くにつけ、心強く感じました。その普及活動や、指導に関わる者にとって大事なこと、参考になることが満載の講習内容だったと思いますが、皆さんはどう感じられましたか？

昨日の座学での順番が前後しますが、「中期アクションプラン」では、いきなりのショッキングな愛好者数の推移予測の提示。私は常に「楽しさは仲間の数に比例する」と思っていますが、2013年から愛好者は減少の一途をたどって、仲間は減るばかりです。

今ここでアクションを起こさなければバウンドテニスの将来はどうなることか。

ただ、漠然と普及を、ジュニアの育成をと言われても、戸惑い、何から、どのように活動してよいものか分かりませんが、この「アクションプラン」には具体的な指針が提示されているので、これを参考に各都道府県協会と皆さんが一体となって進めて行って頂けたらと思っています。この進めて行くという中で大事なことが、人とのコミュニケーションの取り方です。

協会の役員関係、教室での生徒さんとの関わりかた、既存の会員さんがより楽しく、長く続けて頂くための心配りなど。ここで、良好な関係性の構築に欠かせないのが「ペップトーク」、人をやる気にさせるリーダーが身に付けるべき大事なツールを西澤先生に教えていただきました。

「励ます技術」イコール「ペップトーク」、激励のコーチングトークを身に付けたいものですね。

長崎県協会理事長の塘さんの普及活動報告のお話は凄かったですね。

実体験から出てくる言葉は、よどみ無く、原稿を見ることもなく、完璧に取り組んで来られた経緯を話され、聞いている私達の心に刺さりました。

次に医科学部会平山コーチの「通称サービス病のイップス」

これは技術的な決定的な原因がある場合は治療も可能な場合もありますが、緊張が高じて頭が真っ白になり、サーブってどう打つのか分からなくなるとか、手が震えたり、振り切れなかったりする精神的なことが原因の場合は治療が難しいです。

そんな中で平山コーチや村上コーチが提案してくれた色々なサービスの練習。

これをやることで不安無く打てるものが見つかるかも知れません。

私が毎週指導に行ってる越前市教育委員会主催のバウンドテニス教室でサーブが苦手な人がい

るのですが、チョット面白がって「紅ちゃんサーブ」を披露してみんなにやってもらったら、その人にバッチリはまって凄いサーブが打てるようになりました。

克服のきっかけは色々あるとおもうのですが、指導者が深刻にならないこと。

ここでも西澤イズム。ペップトークが生きてくるかも知れませんね。

磨井先生のアンチドーピングは、スポーツマンとして守るべき大事なこと、フェアであること、選手自身の健康を守ること、スポーツの価値をそこなう反社会的行為であることを再確認させて頂き、コンプライアンスに関しても、スポーツの現場だけでなく社会生活上においても守らなければいけない、ルールを守る為の基本原則で、協会の存続にも関わる大事なことです。

トランスジェンダーに関しては、もう身近に迫っている問題で、県大会や全国大会にもエントリーしてくることもあり、得ることかもしれません。

オリンピックでは対応が決まっていますが、バウンドテニスではどうするのか？この委員会の中で話し合い、早急に対応を検討する必要性を感じます。

また、大会運営部会の岩崎コーチからの「大会会場における不慮の事故等の対応」は大会のみならず練習会場においても起こります。スポーツは心身の健康作りに最適ではありますが、怪我なども日常的に発生しています。起こった時の適切な対応がその後の回復に大きく関わり、心情的、法的なトラブルの回避にも繋がるので、協会として、指導者として配慮していかなければいけない問題です。

今日の実技ではジュニア普及部会の荒川コーチが、将来のバウンドテニスを支えてくれるジュニアの育成に繋がる「アクティブチャイルドプログラム」の一部を紹介して下さいましたが、知らない人との繋がりやチームワークがとれたり、年齢に関係なく楽しむことができました。西澤先生は昨日のペップトークの実践法を示して下さいました。

「救命講習」は私の練習拠点である小学校でフットサルの練習中に心肺停止するという事があったのですが、救急車が来るまでに、学校に設置されていた AED を使ったことで一命をとりとめたこともあり、今年の 2 月に福井県でも、公認指導員、審判員と、この後資格取得を目指す人を対象にした講習会の中で、日赤の指導員さんに来て頂いて勉強させてもらいました。

今日実際に教わったことは、あつてはいけないこと、無いことを願いたいですが、起こってしまった時には、今日の経験が、冷静な対応に繋がるものとおもいます。

田中コーチの「指導実技」は上手くなる、強くなる方法を学び、会員さんが成功体験で喜びを感じ、強くなって試合に勝つことでバウンドテニスがより楽しくなったり、本人が長く続けていくことに繋がり、またこの楽しさを周りの人に伝えていくことにも繋がると思います。

強くなるために大事なことは「まとめ」に記載されている○ミスをしないう緊張感○ミスに罪悪感を持つ○しっかり攻める。繋ぐところは繋いでミスをせず、チャンスではしっかり攻めて決める。

ミスしたことをしっかり受け止め、分析し、修正する。安全に入れていくだけでなく、ウイニングショットを身につける。経験者だけでなく初心者もジュニアも思いっきり打つ練習をする。
チャンスを広げた上で試合を終わらせる決め球の練習をする。

アスリート委員会の皆さんによるパターン練習など「強くなるため」の練習方法を地元を持ち帰り会員の皆さんに伝えて下さい。

セルフジャッジは昨年から取り組んできました。普通の練習試合の中で日常的に行われていることですが、いざ大会で実施となると大変難しいです。

私が言うのは大変はばかりなのですが、福井県の2つの大会で実施してみましたがハッキリ言って大変不評でした。

オーバーネット、タッチネットが見れない、判定が難しい時に相手に有利に出来るのかどうか。出来ないことが多く、特に審判に言われたら諦めが付くところが、不利な判定をされた人には不満というか、腑に落ちないままプレーを続けることも多かったようです。難しいですね。

アスリート委員会の山本さんがデータをもっと集めるために、もうひと大会やってみたいと言ってきましたが全員反対でした。

そもそも審判員が付くようになったのが競技中のトラブルを無くすためです。
今日お話を伺って、セルフジャッジの5原則を全国共通の判定基準として浸透し、日常的に行われている練習試合などで気持ちよく取り組み、しいては大会でも取り入れていく事が可能になっていくのかも知れないとも思いました。

最後の部会に関しては、皆さんの「やる気」が集結し、今後の発展に繋がるもの。
部会を細分化したことで、協会運営が充実し、全国の会員さんの思いに直結した事業が展開され、「中、長期アクションプラン」の達成にも繋がっていくものと思います。

最後に昨年この場でお願いした、新たな可能性に向けて「ドアをノック」をして下さいましたか。
一人でも会員を増やすことが出来ましたか？新しいクラブを立ち上げる事ができましたか？
難しい事ですが、あきらめずノックし続けて下さい。

長くなりましたが、皆さんの今後の益々の活躍をお願いして振り返りとさせていただきます。
有難うございました！